

[原著]

## 〈書く行為〉の認知と記述

向井良人 水本 豪

Freshmen's description and self-awareness about writing

Yoshito MUKAI, Go MIZUMOTO

「事実と意見」および「自分の考えと筆者の考え」を区別して作文し、それらを段落とする一続きの文章を完成させるという作業を、段階を分けて15週のプログラムとして大学1年生に課した。指定した文章作成と同時に、その作業での気づきを書くことも課した。気づきを書くことで学生は書くことの難しさを言語化する作業に取り組み、結果として「文章の書き方」を発見した。この一連の作業では、教員は作業指示は出したが作文技法を解説することはしていない。にもかかわらず、最終的には多くの学生が文章の書き方に気づいている。作文をさせるだけでなく、「何について書いたのか」「そこで何を感じたか」という認知を促すことにより、15週に渡る作業が1つのプログラムとして効果を発揮した。「書くことについての気づき」の記述を促すことは、「日本語力」涵養の鍵となる。

キーワード：文章，気づき，書く，認知

### I. 緒 言

平成24年度、筆者（向井）は熊本保健科学大学保健科学部の1年次前期に開講される教養必修科目「情報科学」（30時間・1単位）において、新聞コラムを使った継続的な文章トレーニングを試行した。対象としたのは筆者が担当する3クラスで、受講者数は合計156名である。毎回同じ新聞コラムを素材として異なる指示を与え、15週に渡って文章作成をさせると共に、各回の作業での気づきを自由に記述させた。この一連の作業によってできた短報を、さらに学期末レポートとして整えることを受講者に課して仕上げとした。本稿では、文章を書くという行為を大学1年生が入学から4か月の間にどのように認知するのか、そして、その認知が作文技術をどのように変えうるかということについて、受講者が毎回の気づきとして記した文（文章）をテキストデータとして利用しながら読み解く。

### II. 方 法

この文章トレーニングは端的には「短報を段階的に作成しつつ、文章の書き方について試行錯誤と内省とを交互に積み重ねる」プログラムである。まず、第1週目の授業において授業概要を説明する際、この文章トレーニングについては当日のレジュメに以下のように記載した。

この授業での試みとして、毎回15分ほど時間を使い、授業最終回までかけて一つの作文を仕上げてもらおう。テーマは全員同じ。最終的な字数は、今は意識しなくてよい。大学生のレポートで必ず要求される「事実と意見を区別して書く」ことを最重点目標とし、成果物はレポート課題として成績評価の対象にする。作業の進め方として、毎回、ワープロで書いた文章を提出してもらい、その中から5～10人分ほど作例を紹介する（匿名）。他人の作例を参考にしながら、毎回の指示に沿って自分の文章を直していく。

筆者が受講者に課した作業の概略を順に記す。具体的な指示内容については添付の資料を参照されたい。素材としたのは西日本新聞の「風車」欄で、2012年3月23日の「心情の金環食」と題する555文字の文章である。この文章の大意は「東日本大震災には多額の義援金が集まる一方で自治体による瓦礫の受け入れには反対が根強い。これは〈電気は欲しいが原発はよそに持って行ってほしい〉という心情と同じではないか。こうした心情を合理的に納得させ、瓦礫処理が解決に向かってほしい」というものである。授業第1週目にこの素材文を横書きにしたものを紙媒体で受講者に配付し、各自「事実の記述」と判断する箇所に下線を引かせて回収した。この段階では「事実の記述」の見分け方について説明や示唆は一切行っていない。そのため、下線を引いた場所は受講者により様々であり、この下線部の総和は素材文の文章の全部となった。この結果を第2週目に紹介して事実の区別に関心を向けさせた後、ワープロソフトを使った文章作成に移った。

筆者は「情報科学」の授業をコンピュータ演習室（以下、学内での呼称に従って「LL/PC演習室」と記載する）で実施しており、受講者は授業時間中1人1台のコンピュータ（以下「PC」）を占有使用できる。PCにはMicrosoft Office2010がインストールされており、第2週以降、この課題はワープロソフトWordの文書ファイルを配付・回収する形で進めた。毎回、あらかじめ作業指示を記したWord文書ファイルを教員の手元に用意しておき、それを教卓PCから受講者に一斉配信する。そして、受講者が文章を入力して保存したファイルを教卓PC側に一斉回収するというものである（回収と呼んでいるが、受講者が更新したファイルは各自の個人別フォルダに残るように設定しているので、より正確にはファイルのコピーを集めていることになる）。Word文書ファイルの配付と回収には、LL/PC演習室に導入されている授業支援システム、チエルCaLabo LXを利用した。

第2週目以降の作業指示の内容はおよそ次の通りである。(1) 素材文から事実の記述だけを抜き出して文章にする。(2) 素材文から筆者の意見だけを抜き出して文章にする。(3) 素材文のうち事実の記述に対して自分の意見を書く。(4) 素材文のうち筆者の意見に対して自分の意見を書く。(5) 上記(1)～(4)の作業でできた文章を1つの文書ファイルにコ

ピー・貼り付けして順に並べる。(6) 上記(5)の作業でできた文章を4段落構成の文章として整える。(7) 指定された書式に従ってレポートとして体裁を整え、提出する。上記の作業のうち(1)から(4)まではそれぞれ2週(2回)ずつ続けて行い、(5)と(6)を第11週から第15週にかけての5回で行った。(7)は授業時間外の課題とした。上記(1)から(4)について同じ文章作成を2週にわたって続けた理由は2つある。1つは作業内容を意識させ定着を図るためであり、もう1つは欠席者が追い付くことができるようにするためである。また、上記(1)から(6)までの文章作成を行わせる都度、「上記の作業で気になったこと、気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい」という指示を与え、気づきを自由に記入させた。第15週にはその回の気づきに加えて、第1週から全部の作業を振り返っての気づきも記入させた。各回の作業時間は気づきの記入まで含めて毎回10分を目安とし、原則として90分授業の中盤に実施した。このようにして毎週150前後のファイルが集まる。なお、第4週は授業内容の構成上、この文章課題を実施しておらず、実施したのは15週のうち14週である。受講者は上記(7)を除けば授業の都度1回約10分、合計140分程度の作業に取り組んだことになる。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 気づきの記述における頻出単語

筆者は回収したWord文書ファイルのうち各回の気づきの記載を、週数、学生番号と共にExcelに転記入力した。3つのクラスを本稿ではA、B、Cクラスとしておく。受講者数はそれぞれ41名、57名、58名である。作成したのは、Aクラスの第2週から第15週までの記載（ただし先述の通り第4週は実施していない）を転記したシートと、3クラス全員の第11週から第15週までの記載を転記したシートである。これらのシートを加工して、テキストマイニング用のフリーソフトウェアTTM (Tiny Text Miner) により単語の出現状況を調べた<sup>1)</sup>。さらにTTMの出力結果を用いて、上記(7)のレポートの評点と、各回の気づきにおける語彙の相関係数を求めた。

以下に示す表1および表2は、3クラス全員の第11週から第15週までの気づきの記述をTTMで分析

表 1. 気づきの記述における頻出単語と出現頻度（回ごとの降順）

順位	第11週		第12週		第13週		第14週		第15週		まとめ	
1	意見	68	文章	75	文章	85	文章	62	文章	65	意見	100
2	事実	52	難しい	46	難しい	46	難しい	40	段落	35	事実	86
3	文章	47	意見	39	文	38	段落	40	意見	28	文章	79
4	自分	38	事実	33	事実	34	文	35	文	27	難しい	38
5	筆者	27	段落	28	意見	31	意見	29	事実	27	自分	29
6	考え	18	一つ	23	筆者	24	事実	27	難しい	25	文	27
7	コピー	18	部分	15	考え	24	自分	21	自分	20	作業	26
8	難しい	16	文	14	自分	23	改行	20	一つ	20	区別	25
9	部分	13	筆者	13	段落	18	一つ	15	作業	11	一つ	16
10	今	13	自分	12	部分	13	気	11	筆者	10	最初	16
11	記述	13	作業	10	作業	13	前回	10	レポート	10	段落	14
12	作業	10	内容	10	よい	11	筆者	9	考え	10	レポート	14
13	文	8	レポート	10	繋がり	11	まとめ	9	よい	10	考え	14
14	内容	8	うまい	9	記述	10	部分	8	長い	9	大変	14
15	多い	8	今	8	一つ	9	作業	8	前回	8	筆者	11
16	短い	8	それぞれ	8	前回	9	繋がり	8	部分	8	何	10
17	区別	7	よい	7	書き出し	9	今	7	今	8	よい	8
18	違い	7	考え	6	今回	8	うまい	7	内容	7	今	8
19	よい	6	気	6	今	7	レポート	7	大変	7	それ	8
20			ない	6	気	7	全体	7	まとめ	6	作成	7
21			構成	6	ない	7	一貫性	7	コピー	6	気	6
22					うまい	6	考え	6	ない	6	構成	6
23					訂正	6	内容	6	見出し	6	今回	6
24					言葉	6	大変	6			曖昧	6
25					最初	6	コピー	6			最後	6
26					おかしい	6						
27					一文	6						

した結果の一部である。表1は、回収した文書ファイルのうち、気づきとして書かれた文（文章）に用いられている名詞・形容詞を各回の出現頻度（合計）の降順にソートして、6回以上登場する語までを掲載した。品詞を名詞と形容詞に限定したのは比較の便宜のためである。「難しい」と「むずかしい」のように漢字とひらがなの表記は区別せずに同義語と定義して処理を行った。表の右端の「まとめ」の列は、第15週にその回の作業での気づきとは別に記載欄を設けて「第1回から今回までの作業を通して気づいたこと」として書かせたものについての結果である。

表2は、第11週から第15週（「まとめ」も含む）までの出現頻度合計の降順にソートして上位20位までの語を示したものである。それぞれの語について、各回の出現頻度も示している。各回の回答数は、表2の最下段に示した。回収したWord文書ファイルであっても、未記入のものは回答数に含んでいない。

表1からは、毎回比較的上位に位置する語と、順位が大きく変わる語があることがわかる。表2での

上位4語「文章」「意見」「事実」「難しい」は、表1で見ると第12週以降はどれも出現頻度6位以内である。第11週は「難しい」が8位と、やや低くなっているが、これは第11週の作業が、前回までに作った文章のコピー・貼り付けという単純作業だったことから納得できる。僅差ではあるがこの回は「コピー」の方が「難しい」よりも出現頻度が高い。

## 2. 気づきの記述が意味するもの

表2で総合第7位の「段落」は、第11週では2箇所にはしか見られないが、第12週には28箇所に見られる。第12週には前週の作業に続いて「貼り付けた文章をそれぞれ1つの段落として、全体が4段落構成のレポートになるように」と指示を与えている。よって受講者はこの段階で初めて段落を意識して文章を見直した。総合第9位の「一つ」が第12週になって増えたのも同じ理由による。それまで関連づけを意識することなく異なる指示の下に別々に作成してきた文章を、ここで初めて「一つの文章」として意識したのである。第12週の気づきの例を以下に

表2. 気づきの記述における頻出単語と出現頻度（合計の降順）

順位	語	第11週	第12週	第13週	第14週	第15週	まとめ	合計
1	文章	47	75	85	62	65	79	413
2	意見	68	39	31	29	28	100	295
3	事実	52	33	34	27	27	86	259
4	難しい	16	46	46	40	25	38	211
5	文	8	14	38	35	27	27	149
6	自分	38	12	23	21	20	29	143
7	段落	2	28	18	40	35	14	137
8	筆者	27	13	24	9	10	11	94
9	一つ	2	23	9	15	20	16	85
10	考え	18	6	24	6	10	14	78
11	作業	10	10	13	8	11	26	78
12	部分	13	15	13	8	8	5	62
13	今	13	8	7	7	8	8	51
14	区別	7	5	1	4	3	25	45
15	よい	6	7	11	2	10	8	44
16	レポート	0	10	2	7	10	14	43
17	内容	8	10	5	6	7	5	41
18	気	5	6	7	11	4	6	39
19	コピー	18	5	1	6	6	2	38
20	大変	3	4	3	6	7	14	37
回答数		140	133	138	136	143	141	831

示す。

- それぞれの段落をまとめるのに苦労した。
- 文章がつながるように、少し書き直した。今まで書いてきたことが、一つのレポートになってとても見やすくなった。
- それぞれ別の文章をつなぎあわせるのは、想像していたより難しかった。内容がかぶってるところが多かったので一つの文章にするのは大変だった。

「段落」の出現頻度として最多の第14週には、「改行」も20箇所が使われている。この回では「書き出しから改行までが1つの段落である」と説明し、前回の文章を手直しさせた。それまでも作業指示に「段落」という言葉を使っていたが、受講者は必ずしもその記述形式を意識していなかった。言い換えれば、文章作成における改行の必然性を意識していなかった。改行によって意味のまとまりを示すことを、この段階で意識したのである。第14週の気づきの例を以下に示す。

- 改行していた前の文を繋げただけだが、結構しっかりとした文章になったと思う。
- 各段落の改行をなくすと読みにくくなるので

は、と思ったが実際にやってみると4段落ごとのすっきりとしたまとまりになって、見た目も良くなったし読みにくくなかった。

- 確かに段落で分けていたのに、改行があるのはおかしいなとまさながら気がつきました。
- 4つの段落を更に複数の段落に分けないように作成していると、思っていたより私が改行をたくさん使っていたことに気づいた。改行を使いすぎると文のまとまりが曖昧になってわかりにくいものになってしまうので、これからは改行のタイミングにも気をつけてレポート等を作成しようと思った。

このように、気づきの記述に用いられる語は各回の作業指示を反映している。それは「受講者が何に注意を払ったか」にとどまらず、「受講者が何に注意を払ったかを受講者自身がどのように言語化し自覚したか」を示すものである。それは新しい気づきの体験を軽い驚きと共に綴ったものであるかもしれない。あるいは半ば条件反射的な紋切り型の応答であるかもしれない。「難しい」の出現頻度は総じて高いが、感想に「難しい」と書くこと自体は特段難しいことではない。それよりは、「どのように難しいのか」を書くことの方が、明らかに難しい。しかし

各回の気づきを見ると、受講者の多くが「どのように難しいのか」を真剣に書き表そうとしている様子が窺える。第12週と並んで「難しい」の出現頻度が高かった第13週には、例えば以下のような気づきが寄せられている。

- 文と文とを繋げるときに、前後の文脈を理解する必要があった。そこに苦戦した。
- 各々の作業では何の違和感もなかった部分も今までのものと組み合わせてみると同じことを書いていたりして、改めてこの課題の難しさを実感した。
- 全体でひとつの文章として完成させるために以前の文章を読み返してみると、自分が設問の意味をよくわかっていないことに気づいた。

また、同じ第13週の時点で、既に以下のような気づきに達した受講者もいる。

- いきなり長い文章を書こうとするとつまづいてしまうが、段落に分けて考えたあとに繋げて修正すると書きやすくなるかもしれないと感じた。事実と考えを分けて書くと、読みやすい文章になると思う。
- 今までの授業でまとめてきた文章が今回の授業で1枚のレポートになり、すっきりと嬉しい気持ちになった。また、意見と事実で分けて書くことや筆者の言葉と自分の言葉を分けて書くことで、文体さえ統一されていればこんなにもわかりやすい文章をつくることができるのだと学んだ。

こうした気づきは第15週にかけて増えていく。なお、筆者は第1週の説明において「事実と意見を区別して文章を書く」という目標を示したが、それ以降は、作業の狙いを受講者の気づきに先回りして説明しないように心掛けた。

- 今までやってきたことをつなげることで一つの文になるのはすごいと思った。つなげるのは、結構難しいと思った。(第14週)
- もともとはバラバラだった文が、ただコピー・貼り付けをただけなのに、きちんとひとつの文としてつながっていたので、驚き、

すごいと思った。このように、ひとつずつ行程を踏んでいけば、自分の頭の中で文を整理しながらまとめることができるのではないかなと思う。(第14週)

- 毎回同じ作業を続けていくうちに、段々と事実と意見の区別ができるようになってきた。事実に対する考え、意見に対する考えそれぞれにたいする文章の組み立て方がだいぶできるようになった。(第14週)
- こつこつ書き溜めた文章がこのようなきちんとした形になると、感慨深い。(第15週)
- 文章が繋がって書かれていると、今まで頑張った文章を練ってきたのだという実感がとても湧いた。15回分の集大成だと思う。(第15週)

もちろん、この文章トレーニングは筆者の力量不足も含めてさまざまな制約のもとでの試行であり、受講者全員が等しくこうした気づきに達したわけではない。第15週においても「なにを書き直したらいいかわからなくて難しかった」という記述が見られる。しかし困難を意識している点は前向きであり、むしろ気懸かりなのは同じ第15週に見られる「貼り付けるだけだったので簡単だった」という記述の方である。書くという行為に向き合う姿勢を涵養するには複数のアプローチが必要であろう。ともあれ、この一連の作業を通して、少なからぬ受講者にとって作文技法への気づきが達成感と共にもたらされたということ、そして「受講者が自分で気づいてそれを書き表した」ということが重要である。言い換えれば「気づかせるために書かせた」ということである。以下は「第1週から第15週までの作業を通して」の気づきの例である。

- 最初は事実と意見の違いがよくわからなかったけど、授業を通じてわかるようになって嬉しかった。
- 何度も同じ作業を繰り返して何をやるのだろうと思っていたが、いざひとつのものにしてみたらこまめに段階を踏んで作ったほうが作りやすいときもあるのかもしれないと思った。
- 文章をまとめる力が最初の授業時よりうまくなったような気がした。
- 最初は何のために作業をしているのかよくわ

表3. 気づきの語彙とレポート評価の相関 (Spearman の順位相関)

順位	語	相関係数	順位	語	相関係数
1	事実	0.436	8	簡単	0.281
2	文章	0.417	9	よい	0.279
3	一つ	0.397	10	段落	0.277
4	難しい	0.351	11	判断	0.245
5	繋がり	0.344	12	前回	0.239
6	言葉	0.322	13	記述	0.237
7	部分	0.300	14	意見	0.217

からなかったが、最終的にひとつのまとまった文章になったので実際自分も活用してみようと思った。

- 最初は何をしているのかよく分からなかったけど、全部を通して、きちんと段落わけされた文が完成したのすごかった。

15週に渡って同じ素材文を使いつつ、毎回異なる視点で文章作成を要求したことにより、受講者は文章を多面的に読むことになった。また、前回までに自分が書いたものを「再利用」させることによって、受講者は書いたときとは異なる視点で自分の文章を読み返し、そこから「自分は何をどう書いているのか」について気づきを得た（第3週と第6週には他の受講者の作例も匿名で示し、「他の人はどう書いたのか」を意識させている）。それに加えて各回の作業での気づきを書かせることによって、三重のリフレクションが構成される。果たして最終回までに寄せられた受講者の感想は多くが期待通りのものであった。こうした仕掛けについての「種明かし」を一貫して避けたことも奏功したといえよう。

### 3. 気づきの語彙とレポートの評価

次に、気づきの記述に使われる語彙と学期末レポートとの評価との相関について検討する。筆者は「情報科学」では筆記試験と複数の提出物で成績を評価している。100点満点のうちレポートは10点である。このレポートは第15週までに作成した文章を仕上げて提出するというものである。文字数は指定していないが、「各段落200字」を一応の目安として示した。200字という目安は第7週以降に示してきたものと同じである。4段落構成とすることを要求しているので、全体として800字を目安とする短報である。評価にあたっては内容の整合性と文書の体裁を重視し、書式設定や段落構成などの不備を中

心に減点した。不備がなければ10点となる。受講者156名の平均点は8.2、最頻値は10、中央値は9であった。このうちAクラス41名について、気づきの記述で出現頻度が高い単語（名詞・形容詞）上位34語の使用回数と、レポート評点の順位相関を求めた。分析にはSPSS12.0を使用した。相関係数の降順に、14位までを表3に示す。表3の左半分にあたる7位までが相関係数0.300以上となっている。なお、このクラスは授業15回のうち欠席者が延べ7名であり、「無欠席または欠席1回」の学生が95%を占める。そのため、分析にあたって欠席の影響は無視した。

気づきの記述における「意見」の出現頻度は表2に示したとおり「文章」に次いで高いが、「意見」とレポート評点との相関は他の語よりも弱い。一方、表2で「意見」と共に出現頻度の総合4位までを占める「文章」「事実」「難しい」の3語は、評点との間にもいくらかの相関を見出すことができる。表3で第3位の「一つ」、第4位の「難しい」、第5位の「繋がり」、第6位の「言葉」は、気づきの記述の中では例えば以下のように用いられる。なお、「難しかった」は形態素解析において原形「難しい」としてカウントされている。

- 一つの文書にまとめるのは、言葉のつながりなどを考えなければいけないので、難しかったです。(第13週)

表3に示した相関係数で0.300以上を「弱い相関あり」と見なすなら、上に示した第13週の気づきのような文で作業を振り返る（言語化する）ことができるか否かと、体裁の整ったレポートを作成できるか否かは、ある程度関わっているということになる。それは単に「気づきを丁寧に書くことができる学生

はレポートの体裁も意識することができる」ということではなく、「書くという行為を分析的に記述するにあたって特定の語彙を発見できる力が、レポートの仕上がりにも関係している」ということである。ここでいう「特定の語彙」とは、指示された作業を遂行する上で考慮すべきキーワードを表している。

ちなみに、第2週から第15週の「まとめ」まで、気づきの記述からTTMによって抽出された名詞・形容詞433語について、それらの語彙の使用頻度を個人別に合計すると、このクラスでは最多は309、最少は22であった。この個人別合計の場合、気づきを書かずに提出した（あるいは提出しそこなった）回数が多い受講者ほど値が極端に小さくなる。この「使用頻度個人別合計」とレポート評価の相関係数を求めたところ、0.370であった。「気づきを多く書く（つまり積極的に書く）学生はレポートの体裁も意識することができる」ということが示唆されている。なお、特定の語の組み合わせでは、相関係数は更に大きくなる。表3で相関係数が高い「事実」と「文章」について個人別に使用頻度を合計し、レポート評価との相関係数を求めたところ、0.550であった。さらに、「事実」「文章」「難しい」の3語について個人別に使用頻度を合計して同様に相関を求めると、0.577であった。短絡すれば、これらの語を組み合わせることで気づきを記述した受講者はレポートの仕上がりもよかったということになるが、これは今後のための作業仮説としたい。

#### IV. 結 語

語の共起関係の分析は今後の課題であるが、ある程度多くの語（名詞・形容詞）を用いて気づきを記述するには、それらを適正に配置する文脈が選り取られなくてはならず、おのずから「〈言葉〉の〈つながり〉を考えるのは〈難しい〉」といったように、幾通りかの組み合わせに収斂していくことになる。言い換えると、各回の作業の気づきを自由に書くという行為にも、その回の作業内容に応じてある種の文脈の選択と語の配置パターンが暗に要求される。それ（気づくべきこと）を察知して書き表し（アウトプット）、さらに書いたものを読むこと（インプット）によって気づきの連環を構成していくことができるということこそ、「能力」なのである。

- 話をうまくつなげるようにするのは難しく段落を変えるだけでなく、要らない部分は添削をするなどの工夫が必要だと思った。（第15週）

この文章トレーニングは、「作業のついで」を装いつつ、気づきの記述を要求することによって気づき自体の認知を促した。無論、気づきを言語化する能力そのものがこの作業によって直接にもたらされるわけではない。この試みが示唆しているのは「自分の書き方について書く」ことがもたらす発見である。受講者は気づきを書くことを通じて気づきを構築し、それを読むことで自らの気づきを発見した。学生たちは入学から4か月の間、「どうすればよい文章になるのか」という暗黙の問いの下に自分で作文技術を発見し、かつ、「作文技術を発見している自分」を発見したのである。合計すれば実質3時間程度の作業だが、授業の「合間」に設定し15週に渡って継続したことで定着させることができた。軽い驚きや喜びと共に得られた作文技術の気づきは「覚えた」のではなく「発見した」ものであるがゆえに、「忘れる」ことがないだけでなく、今後の新たな気づきへの水路づけともなり得るだろう。

#### [資料]

##### 第1回課題（「文章課題（1）」）

以下の横書きの文章のうち、事実の記述だけに下線を引いて提出しなさい。

東日本大震災による瓦礫は、復興庁によると、推計で2252万8千トンという想像もつかない量である。復興の大きな障害にもなっているが、ようやく処理に向けての動きが出てきた。福岡県でも、北九州市議会に次いで福岡県議会が受け入れを首長に要請する決議採択に傾いている。

瓦礫の受け入れが進まない背景には、放射能汚染への警戒感が根強いようだ。これまでの原発事故対策への不満や、政府のあいまいな安全基準に対する不信感もある。北九州市議会では決議に反対する市民が傍聴席から抗議して、警備員に制止された。

しかし、一方で、国民の多くは被災者の立ち直

りと、被災地の復興を願っている。日本赤十字など4団体には3千億円を超える義援金が寄せられ、佐賀市や長崎県佐世保市では、被災地から避難してきた人たちに寄り添って励ますボランティア活動も続いている。

このギャップをどう見たらいいのか。同情と金を出すが、瓦礫は嫌だというのでは、電気はほしいが、原発はよそに持って行ってほしいという"心情"と同じではないかと思ったりする。

外側はきれいだが中身は黒い、金環食に似てなくもない。そういえば、今年は鹿児島から千葉県にかけての太平洋側で5月21日に金環食が観察できる。それまでには、そうした"心情"を合理的に納得させ、瓦礫処理が解決に向かってほしいものである。

2012年3月23日 西日本新聞

#### 第2回課題(「文章課題(2)」)

- (1) 以下の課題文<sup>2)</sup>を、事実の記述だけの文章に作り替えなさい。
- ・事実以外の部分を削除し、事実の部分を文章として整えること。
  - ・前回の課題で下線を引いた部分と異なってもかまわない。
  - ・箇条書きは不可。文の羅列ではなく、「文章」にまとめること。
- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

#### 第3回課題(「文章課題(3)」)

- (1) 次頁に示す3つの文例<sup>3)</sup>を参考にして、もう一度、事実の記述だけの文章を作りなさい。
- ・「事実の記述」について解釈が分かれている部分(マーカー部)を、よく考えること。
  - ・前回と同様、以下の文章を編集すること(事実以外を削除して、残った部分をつなぐ)。
- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

#### 第4回課題(「文章課題(4)」)

なし<sup>4)</sup>。

#### 第5回課題(「文章課題(5)」)

- (1) 以下の課題文を、筆者の意見(考え・願望も含む)だけの文章に作り替えなさい。
- ・意見以外の部分を削除し、意見の部分を文章として整えること。
  - ・箇条書きは不可。「文章」にまとめること。
- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

#### 第6回課題(「文章課題(6)」)

- (1) 次頁に示す4つの文例<sup>5)</sup>を参考にして、もう一度、意見(考え・願望も含む)の記述だけの文章を作りなさい。
- ・「意見の記述」について解釈が分かれている部分(マーカー部)を、よく考えること。
  - ・前回と同様、以下の文章を編集すること。
- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

#### 第7回課題(「文章課題(7)」)

- (1) 以下の課題文において事実として述べられていることに対し、あなたの考え(意見・感想など)を書きなさい。
- ・課題文を編集するのではなく、自分の考えを作文すること。
  - ・作文にあたって、どの記述(事実)に対する考えなのかを明確にすること。
  - ・箇条書きは不可。文章で表現すること。
  - ・文字数は200字以上とする。上限は設けない(行数は増やしてよい)。
- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

#### 第8回課題(「文章課題(8)」)

- (1) 以下の課題文において事実として述べられていることに対し、あなたの考え(意見・感想など)を書きなさい。
- ・課題文を編集するのではなく、自分の考えを作文すること(課題文の枠の外に書く)。
  - ・作文にあたって、どの記述(事実)に対する考



えなのかを文中で明確に述べること。

- ・前回書いたものをコピー&ペーストして、それに追記してもよい。
- ・文字数は200字以上とする。上限は設けない(行数は増やしてよい)。

- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

**第9回課題(「文章課題(9)」)**

- (1) 以下の課題文において筆者の意見として述べられていることに対し、あなたの考え(意見・感想など)を書きなさい。

- ・課題文を編集するのではなく、自分の考えを作文すること(課題文の枠の外に書く)。
- ・作文にあたって、どの記述(意見)に対する考えなのかを文中で明確に述べること。
- ・文字数は200字を目標とする。

- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

**第10回課題(「文章課題(10)」)**

- (1) 以下の課題文において筆者の意見として述べられていることに対し、あなたの考え(意見・感想など)を書きなさい。

- ・課題文を編集するのではなく、自分の考えを作文すること(課題文の枠の外に書く)。
- ・作文にあたって、どの記述(意見)に対する考えなのかを文中で明確に述べること。
- ・前回書いたものをコピー&ペーストして、それに追記してもよい。
- ・文字数は200字を目標とする。

- (2) 上記の作文で気をつけたこと(または、気になったこと、気づいたことなど)を、一行でも一言でもよいので書きなさい。

**第11回課題(「文章課題(11)」)**

- (1) これまで上書き保存した課題(Word文書)を順に開き、あなたが書いた文章を、以下の①～④に「コピー&貼り付け」しなさい。今回は、単に「コピー&貼り付け」だけでよい(時間があれば文章を整えること)。該当する文章がないときは、その部分を新たに書き起こしなさい。文字

数・行数の制限は設けない。

- ① 事実についての記述。(「文章課題(2) 記入」または「文章課題(3) 記入」からコピーする)
- ② 筆者の意見の記述。(「文章課題(5) 記入」または「文章課題(6) 記入」からコピーする)
- ③ 事実の記述に対するあなたの考え。(「文章課題(7) 記入」または「文章課題(8) 記入」からコピーする)
- ④ 筆者の意見に対するあなたの考え。(「文章課題(9) 記入」または「文章課題(10) 記入」からコピーする)

- (2) 上記の作業で気になったこと、気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい。

**第12回課題(「文章課題(12)」)**

- (1) 前回の課題で以下の①～④に貼り付けた文章をそれぞれ1つの段落として、全体が4段落構成のレポートになるように、まとまりに配慮しつつ各段落(①～④)の文章を整えなさい。該当する文章がないときは、その部分を新たに書き起こしなさい。文字数は、①～④それぞれ200字程度を一応の目安とする。課題文(新聞コラム)は2ページ目に掲載しているの、必要に応じて利用すること。

- ① 事実についての記述。(「文章課題(2) 記入」または「文章課題(3) 記入」より)
- ② 筆者の意見の記述。(「文章課題(5) 記入」または「文章課題(6) 記入」より)
- ③ 事実の記述に対するあなたの考え。(「文章課題(7) 記入」または「文章課題(8) 記入」より)
- ④ 筆者の意見に対するあなたの考え。(「文章課題(9) 記入」または「文章課題(10) 記入」より)

- (2) 上記の作業で気になったこと、気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい。

**第13回課題(「文章課題(13)」)**

- (1) 前回の課題で作成した①～④を、以下に示す各段落の書き出しに続けなさい。文章全体の流れを考えて内容を整理すること。参考のため課題文(新聞コラム)を2ページ目に掲載している。

## 第1段落（事実の記述）

2012年3月23日付の西日本新聞コラム「風車」によれば、次のような状況が生じている。

## 第2段落（筆者の考えの記述）

これについて筆者は次のように考えを述べている。

## 第3段落（事実の記述に対する自分の考え）

ここで述べられている現状に対して、私は次のように考える。

## 第4段落（筆者の考えに対する自分の考え）

また、筆者の考えに対して、私は次のように考える。

- (2) 上記の作業で気になったこと、気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい。

## 第14回課題（「文章課題（14）」）

- (1) これまでに作成した文章を、以下の4つの段落ごとに完成させなさい。各段落の書き出しは以下に指定するとおり。なお、4つの段落を更に複数の段落に分けてはならない（改行してはならない）。書き出しから改行までが1つの段落である。

※次回、レポート課題として提出方法を指示する。

第1回の授業で予告したとおり、成績評価の対象にする。

評価のポイント：

- ①段落ごとに内容が書き分けられているか。
- ②全体として意味内容に一貫性のある文章となっているか。

## 第1段落（事実の記述）

2012年3月23日付の西日本新聞コラム「風車」によれば、次のような状況が生じている。

## 第2段落（筆者の考えの記述）

これについて筆者は次のように考えを述べている。

## 第3段落（事実の記述に対する自分の考え）

ここで述べられている現状に対して、私は次のように考える。

## 第4段落（筆者の考えに対する自分の考え）

また、筆者の考えに対して、私は次のように

考える。

- (2) 上記の作業で気になったこと、気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい。

## 第15回課題（「文章課題（15）」）

- (1) これまでに作成した文章から各段落の見出し（「第1段落（事実の記述）」など）を削除して、4つの段落で構成された1つの文章として整えなさい。これをさらに別紙の指示に従ってレポートとして仕上げ、提出すること。レポートは成績評価の対象とする。
- (2) 上記の作業で気になったこと、気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい。
- (3) 第1回から今回までの作業を通して気づいたことなどを、一行でも一言でもよいので書きなさい。

## [注]

- 1) TTM 0.70ならびに形態素解析エンジン MeCab 0.994を使用した。
- 2) 第2回以降の課題における「課題文」はすべて、第1回で示したコラムを指す。毎回、作業指示と共に全文を与えているが、ここでは重複するので割愛する。
- 3) 回収した第2回課題の中から3例を選び、文例として匿名で示した。
- 4) 授業内容の都合上、第4週目は当課題を実施しなかった。内容的に第3回課題と第5回課題は連続しているが、週数と回数的一致による混乱を避けるために第4回課題を欠番扱いとした。
- 5) 回収した第5回課題の中から4例を選び、文例として匿名で示した。

## [文献]

松村真宏・三浦麻子、2009『人文・社会科学のためのテキストマイニング』誠信書房

（平成25年1月31日受理）

## Freshmen's description and self-awareness about writing

Yoshito MUKAI, Go MIZUMOTO

The aim of this paper is to demonstrate that verbalizing self-awareness about writing is a key concept to develop students' Japanese skills. One hundred fifty six Japanese freshmen in Kumamoto Health Science University engaged in 15 weeks composition program. The content of the program was 1) reading a newspaper report differentiating "facts" and "author's opinions", 2) isolating the "fact" part and "opinion" part, and composing each part into a paragraph, 3) adding students' opinion about "facts" and "author's opinion" into each paragraph, 4) combining each paragraph into one essay, 5) in addition to the composition, verbalizing the awareness about their writing every time. Although a series of the above task was engaged without any instruction about writing skills, many students noticed a way of writing by themselves. Not only composition but also verbalization caused more attention on their metacognition about their writing abilities, and this change made our program effective.